

●京田辺市三山木 障がい者施設「ライフ・アシスト」から中野さんが来所 竹ペン製作現場 10月4日午後4時

9月14日に京田辺市大住の青少年センターで磯谷館長から紹介を受けて三山木のライフ・アシストさんを訪ねるとまず制作現場を訪ねることから始まるようになって、職員の中野亮さんがお越しいただいて、論議を深め合いました。館長の井山信久さんは一休が丘在住の方で、里山の会については深いご理解をいただいていた。竹藪で竹の処分（チップ化）して販売をされておられましたので、農家の方の困りようはすぐ共有できました。これからお付き合いを深めて行ければと思います。

●竹割作業 竹割機運搬設置 竹割実行20本 10月5日（森島、太田）、6日（森島、太田、播川）

今年は竹蛇籠の製作講座を实行しておかないと、身についた技術を忘れるのではないかと思います。今年は6月と8月に中聖牛を飲み込むほどの増水があり、中聖牛の姿が変わってしまいましたので、ぜひ製作しておくべきです。木津川出張所に河原の竹伐採時の竹をお譲りいただきたいと申し入れ、10月2日に搬入いただきました。さっそく例年通り竹割機の設営を行い、1年ぶりに作業を思い出しながら竹割り作業を实行しました。

●生き物フェスへの備品整理宵積み 7日

第1回いきものフェスが8、9日の両日開催されるので里山の会は竹蛇籠製作講習会を両日開催するので7mの真竹40本を4分割しました。この作業には里山の会が高橋慶平さんに製作をお願いした竹割機が役割を果たしてくれたので作業が進み、幅整成や節落とし、ひび入れを行って準備ができました。完成素材を軽トラック2台に積み込み、他の備品を加えて宵積みしておきました。太田さん播川さん森島さん大村さんが大奮闘していただきました。

●竹ペン160本製作 木下勉さん 生き物フェスで宣伝

10月の生き物フェスタに間に合わせるために、竹サインペン1000本を製作してみましようと9月初めから取り組みました。ところが竹を同じ寸法に切りそろえるには手鋸では相当難しく、また同じ寸法に割り揃えることも至難であること

も分かりました。これなら可能になるだろうとした形は、できるものの揃ったものにはなりませんでした。工夫に工夫を凝らしてやっと140本を木下勉さんが作り上げることができて「生き物フェスタ」に間に合いました。長さをそろえるには竹切り専用の丸鋸が必要です。そして細かな細工となる割機の改良も必要だと分かりました。今大まかな手持ちの道具では大量に製作することは不可能でもあるので、竹切専用鋸刃のついた卓上丸鋸と割機の改善に取り組んでいます。また木下さんの奥さんにイラストを描いていただき、美しいパンフレットも作りました。

●午前 7 時 30 分出発 生き物フェスへ軽トラック 3 台と軽ボックス 1 台合計 4 台で北大路の京都府立植物園に出発しました。この日朝集まっていたいただいたのは、大釜、播川、太田、大村、森、福井、有田、山村、電車で：金田と森島、現地で野村、杉本、篠原の方が参加しました。①竹蛇籠製作講習会は、午後から降雨になったにも関わらず、目標は 2 日間で 6 本としていましたが、二組



に分かれて 5 本も作りました。この作業の 1 本目は作業手順を思い出しながらでしたので随分苦労をしましたが、一度思い出すとスピードがついて予想以上の出来栄になりました。植物園にご来場のお客さんも参加され、中にはアメリカから来た若い女性も加わって作業をともに



行いました。②ブース展示では 18 枚のイベントの呼びかけポスターを張り出し、発刊している書籍を展示しました。木津川の草花が 6 冊も購入され、会誌 54 号も一冊購入いただきました。何よりもスッポンの赤ちゃんがとてもかわいい、かわいいと小学生たちに大人気でした。活動紹介ポスター発表では高校生たちからオオムラサキについての熱心な質問が繰り出されました。

●2日目 午前 7 時 30 分出発 軽トラック 2 台と軽ボックス 1 台の 3 台で京都植物園に出発しました。ブース展示では相変わらずスッポンの赤ちゃんに人気がつづきました。竹蛇籠製作講習会では目標が 6 本でしたので、あと 1 本の製作で達成です。随分気が楽になり 2 本作製しました。見学に来られた方々に竹蛇籠の役割、なぜ製作しているのか、製作手順についてとか、竹の種類とか等についての質問に丁寧にお答えすることができました。時間的な余裕があったので大変楽しく交流を深めることができ、これまでにない取組になりました。里山の会の二日目のメインイベントは松かさツリーづくりです。午後 1 時から 2 時間なので、人が集まってきてくれるだろうかと心配していました、終わってみれば 52 人の子ども達が作り上げてくれました。会場もかなり余裕のある広さだったので混雑なくうまく運営ができました。どの子どもも真剣に取り組み姿勢が素晴らしかったです。まさに自然の素材を使っ



てのもので、有料でしたが沢山参加していただきました。良い思い出になったのではないのでしょうか。

竹蛇籠づくり体験感想 WE DO KYOTO! ユースサポーター 小東 近藤 野村 古川

■竹を触った経験はなかったので、触るだけでなく竹蛇籠を編むことができ、いい経験になりました。すっぽんも可愛かったです。

■竹で編まれたカゴはよく見かけるのですが、これほどの大きさのものは見たことがなく、その作り方の複雑さに驚きました。また、竹蛇籠というものを初めて知って、具体的にはどのような効果があるのかということにとっても興味を持ったので、実際に使われているところを見てみたいと思っています。今回は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

■今回竹蛇籠づくり体験をしてみて、竹を加工する大変さを学ぶ事が出来ました。竹蛇籠は非常に大きく、竹を複雑に編んでいくので1つ作るだけで体力を消耗してしまうことが分かりました。また、竹蛇籠がどのように使用されていて、どのような役割があるのか気になったので、今後実際に見に行きたいと考えています。この度は有益な体験をさせていただき、ありがとうございました。とても気さくに話しかけてくださったので楽しむことが出来ました。この経験をユースサポータの活動に生かしていきたいと思います。

■今回、いきものフェス初日に参加させて頂き、偶然にもブースの設置や竹蛇籠の作製のお手伝いをさせて頂くことになりました。参加するまで竹蛇籠や中聖牛の存在を知らず、作製しながらお話を聞き、竹蛇籠が歴史が長く、生き物の住処になることなどを学ばせて頂きました。最初はあんなに硬い竹を編めるのかと心配なりましたが、最終的にすごく綺麗に編むことができ驚きました。作製中さまざまな方が優しく声をかけて下さり、楽しく編み方を覚えることができ、参加して本当に良かったです

●京都生き物講演会 湯本貴和先生の生物多様性の大切さの講演で「竹ペン」の紹介をしてくださいました



講演の最後 竹鉛筆を紹介された 湯本さん 2023年10月9日 きょうと生物多様性センター長

やましろ里山の会がこういうものをつくっておられます
選挙の時にいくと プラスチックのペンをもらいますね
そうではなく これは障がい者がつくられたものです
そういうものをつくっていらっしゃる
こういうものを選挙の時に使ってもらうということは 里山活動につながっています
そういう生物多様性保全活動 プラス アルファ というものを考えていく必要がある
このペンはここで配ってもいいということです みなさん とってください
こんなものを作っておられます



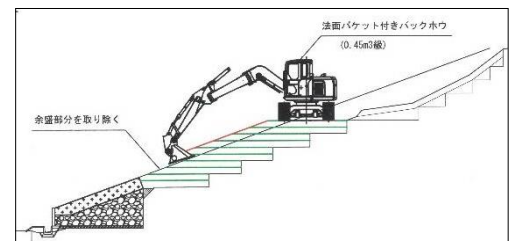
※ 生物多様性センター長の湯本貴和さんが講演の中で紹介された竹の鉛筆ですと言えば
響くようになるでしょう

●同志社大学サッカー部ボランティアの申し入れが届く

11日の事務局会で同志社大学サッカー部からボランティアの申し入れをいただきましたので、どのように受け入れるのかを議論しました。一昨年は里山農園の丸山の草刈りを行っていただきました。NHK・TVで放映されました。また昨年は里山農園で白土山までの周遊通路の開通させて頂きました。さて今年はどうするのかと議論が始まりました。ある理事から木津川の希少植物調査管理作業のうち冬の除草作業で刈り取った雑草の収集作業をお願いすればどうだろうかという提案がありました。木津川堤防24kmに35カ所なので作業人員は配置を工夫する必要がある。また我々里山の会が予定地の草刈り倒しを実施しておかなければことが始まらないといった課題が明らかになりました。クリアするつもりで取り組もうとの意思統一ができました。サッカー部の皆さんにはこの作業は絶滅寸前種と指定されている草花の保全活動に協力をいただくという社会的な名目があるのではないかとと思われるので、お願いしようということになりました。

●木津川で唯一のイヌハギの生息地で堤防強化工事が予定されていることの説明を受ける 10月11日

木津川堤防でここ1か所しか生育している所を含んで堤防の強化工事が予定されているとの連絡がありましたので、木津川出張所で打ち合わせ会議を持っていただきました。説明ではイヌハギの生育場所はぎりぎり避けられていたものでほっとしましたが、里山の会が近畿地方で絶滅していたとされていたレンリソウの生育地が工事範囲に含まれていたことに驚きました。この場所は以前発見したその折に堤防除草作業業者が刈り取ってしまっていて、その場所で燃やしまおうとしたところであり、多くの識者がよく知っている大変重要な場所であることをお知らせしました。



木津川の本流だった時期にイタセンパラを確認した場所で釣りをする参加者—いずれも井手町で



木津川で釣り大会

国の天然記念物の淡水魚・イタセンパラの本津川での復活を目指し「親子魚つり大会」が9月30日、井手町の玉水橋の下流であった。生息環境を良くする活動に取り組むNPO法人「やましろ里山の会」が、子供たちや地域の人たちに関心をもってもらい、将来的な夢の実現につなげようと、小学生以上を対象に初めて企画。木津川市や大阪府枚方市など、京都・大阪両府から26組63人が参加した。

【小泉健一】

本津川でのイタセンパラの生息地の一つだった。浦の確認は2007年が最後とされる。大会会場は流路が変わるまでの本流跡で、普段は池のような「たまり」と呼ばれる場所。本流だった時には、3回にわたり整備した。

イタセンパラ 復活いつか

釣りざおを初めて手にする子供がほとんどで、餌のミミズをつけ、さおを振って水に投げ入れるやり方から学んだ。まったく釣れなかった子供も「悔しいけれど楽しかった」と満足そうだった。

投網分も含め、釣果は約2時間で10種類計73匹。内訳は、在来魚などを捕食し生態系に影響を及ぼす外来魚のオオクチバスが28匹と最も多く、20センチも交っていた。外来魚ではブルーギルも4匹釣れた。在来魚ではフナ25匹、コイ8匹の順に多かった。本流の増

井手 親子 26組挑戦 理解深め

水時に、たまりに入り込み、産卵するなどしているらしい。在来魚はたまりに戻し、外来生物法で放流や飼育が禁止されている外来魚は処分された。

大会には、イタセンパラが淀川水系で唯一確認されてきた大阪市旭区の城北ワンド群で、各種団体や行政機関などが連携し保護活動が続ける「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」(イタセンネット)も協力。

啓発目的で開催している外来魚駆除釣り大会で使う貸し出し用のさおを提携し、アドバイスもした。イタセンネット会長の綾史郎・大阪工業大名誉教授(73)は、参加者から「まては持ち寄る釣り糸を直しながら「たくさん釣った魚がいたことを知り、驚いていると思う。木津川への熱意が高まり、環境の再生につながることを願っている」と話した。里山の会の山村武正常務理事(83)は「地元の人たちの理解と関心を深め、30年後にはイタセンパラが復活している木津川にしたい。その時、第1回の大会に参加してくれた子供たちが、今日のことを覚えていてくれたらうれしい」と語った。



釣った魚が入った水槽の前で、種類などが説明された